ジョイスの自己表現としての『ユリシーズ』

伊　藤　徳一郎

岐阜大学教養部英文教室

(1971年10月30日受理)

Ulysses as Joyce's Self-Expression

TOKUICHIRO ITO
Gifu University

〔I〕

ジョイスの創作理論の中心が，その没個性論にあることは周知の通りである。が,彼の，というよりは,他の作家の場合も含めて，一般に,没個性という考え方が，しばしば,「自己の個性を表現してはならないことである。」と単純に受け取られている事実には一考を要する。特に，ジョイスの没個性論の場合に，そうした傾向が目立っているように思われるが，彼の没個性論は，決して作家の個性そのものを全面的に否定し去ることを主張しているのではなく，生のままの恣意的な個性の表現をおさえる，つまり，素材としての個性をいかに芸術的に，あるいは客観的に昇華して表現するか，その方法・態度について述べているのではないだろうか。この点は，何よりも，『若き日の芸術家の肖像』[1] の芸術論中，芸術家の自己に対する関係を論じたあの部分において，客観的な劇的形式が，抒情的・叙事的形式を経て到達されるべき究極の文学表現形式として称揚されていることから明らかであろう。

> ...The personality of the artist, at first a cry or a cadence or a mood and then a fluid and lambent narrative, finally refines itself out of existence, impersonalises itself, so as to speak. The esthetic image in the dramatic from is life purified in and reprojected from the human imagination. The mystery of esthetic like that of material creation is accomplished... (*A Portrait*, p. 219)

ジョイスが，終始一貫，一小都市に過ぎない故郷ダブリンを舞台にして全く個人的な自己の人生を題材として描きながら，それを普遍的な芸術作品となし得たのは，そうした創作理論の裏づけがあったからと言えよう。

さて，『肖像』の最終章において，主人公 Stephen Dedalus は，故国アイルランドと訣別するに至って次のように宣言する。

...and I will try to express myself in some mode of life or art as freely as I can and as wholly as I can, using for my defence the only arms I allow myself to use - silence, exile, and cunning. (*ibid*, p. 251)〔下線は筆者〕

この宣言ー芸術による自由な全的自己表現ーは，Stephen Dedalus の創造主ジョイス自身が，おのれの芸術目標として掲げた言葉に外ならなかった。実際に，彼の芸術家としての生涯は，J. I. M. Stewartも指摘しているように,[2] この自己の全的表現という課題の実践と完成に捧げられたとみなして差し支えない。ジョイスは，そのような芸術目標を『ダブリン市民』から『フィネガン徹夜祭』に至る一連の作品を通して次々に実現していったのであるが，それは特に，『追放者』を間にはさむ『肖像』と『ユリシーズ』の二つの作品において，より計画的に，また，より完全に実現された。前者の『肖像』は，ジョイスが故国アイルランドでの自己の半生を自伝的に描いた小説であるが，その中で描かれた彼の「肖像」は,「若き日の芸術家の」という限定が加えられていることからも知られるように,完全な,つまり，全体的な「肖像」ではなく，青年時代の，そしてまた，芸術家としての「肖像」であり，いわば，まだ書き加えられるべき部分を残した未完成の「肖像」であった。[3] この未完成の「肖像」は，『追放者』を経て『ユリシーズ』に至って完成されるのであるが，では，それは，どのような部分を書き加え，また，どのようにして完成されていったのであろうか。本稿では，こうしたジョイスの自己表現という観点から『ユリシーズ』をながめ，その最大の問題点の一つである Stephen と Bloom の邂逅の持つ意味を検討していくことにしたい。

〔II〕

〔I〕章で触れたように，『肖像』において，ジョイスは，故国アイルランドと訣別して大陸へ旅び立つまでの歩みを Stephen Dedalus なる分身の姿を通して描いたが，『ユリシーズ』では，その後約二年間の歩みを同じ Stephen Dedalus の1904年6月16日における一日の姿を通して集約的に描き上げた。『ユリシーズ』の一日に集約されたこの二年間の歩みは，Richard Ellmanの精緻な研究から知られるように[4] ーパリーでの孤独と貧困の亡命生活，母の死，妻ノーラとのめぐりあい等ージョイスの芸術家としての，というよりは，むしろ人間としての生涯にとって波乱に富んだ試練の年月であった。『ユリシーズ』は，そうした試練の年月の中で経験されたジョイスの精神遍歴が劇的に，また，象徴的に投影された小説であると考えられる。では，以下，この点を考慮に入れながら，『ユリシーズ』における Stephen の足どりを追っていこう。

『ユリシーズ』は，1904年6月16日，早朝，ダブリン市郊外にあるマーテーロ塔での，Stephenと彼の友人 Mulligan の会話に始まる。その会話は，Stephenの死んだ母についてである。[5] Mulliganは,Stephen が臨終の床での母の最後の願いー膝まづいて神に死後の冥福を祈ることーを聞き入れてやらなかったことに対して厳しく責めたてる。しかしながら，宗教を否定し神に仕えることを拒絶し,芸術家たらんとした Stephen にとって,たとえ母の願いであろうと神に膝まづいて祈ることは，いかなる虚偽・妥協も許してはならない芸術家としての自己の神聖な良心を傷つけることであった。彼は責めたてる Mulligan に対して次のように言い放つ。

— I am not thinking of the offence to my mother.
— Of what, then? Buck Mulligan asked.
— Of the offence to me, Stephen answered. (*Ulysses*, p. 8)

Stephenは，このようにartistic conscienceを理由に，自己の非人間的行為を正当化しようとあがく。しかし，芸術家としての立場から自己を正当化しようとすればするほど，逆に，非情な自己に人間として，彼は苦悩し，"the pain of love"[6]に魂を引き裂れ，"general paralysis of the insane"[7]なる病にとりつかれていく。

ところで，ジョイスの実弟 Stanislaus の言葉によると，生来疑い深かった彼にも幼年時代から二つだけ絶対的に信じ切れるものがあったそうであり，そのうちの一つが a woman's love of her child"[8]，つまり，母の子に対する愛情であったそうである。彼は，そうした母を愛していたが，彼女は自分が仕えることを拒絶した教会・神の愚鈍なまでのしもべであり，自分にカトリック信仰を強要する圧迫的存在であった。[9] 従って，そうした母は，愛情の対象であると同時に，神を拒絶した芸術家として乗り越えなければならない試練の対象でもあった。彼は，母の死に対しても，そうした芸術家としての非情な態度を貫いたのであったが，しかし，いかに芸術信念のためとは言え，母を踏みにじったことに対する人間的良心の可責に彼の心は激しく揺り動かされていった。Stanislaus は，母の死後，ジョイスが，以前の芸術家としての pride と confidence をすっかり喪失し，ちょうど『ユリシーズ』における Stephen のように，毎晩夜遅くまで無頼の徒と連れだって酒にひたり，自滅的な生活を送っていたと述懐しているが，それは，まさしく，その当時の彼の苦悩を示す episode であろうかと思われる。[10] ジョイスは，『肖像』の次作『追放者』の中で，まず部分的に，そうした自己の人間的苦悩の跡を主人公 Richard Rowan の苦悩の一つ—断絶と対立の中で母を死なせたことへの悔恨—に投影させ，[11]『ユリシーズ』における Stephen の苦悩へと発展させていったのであった。

かくして，『ユリシーズ』におけるジョイスの分身 Stephen の放浪は，母に対する非人間的行為によって陥いった精神的危機から自己の魂を救うための苦汁に充ちた放浪となる。それは，裏切った母への人間的良心の可責を通して，失なわれていた人間性を認識し回復するための放浪である。

Stephen は，裏切った母の苦痛にゆがんだ臨終の顔に四六時中つきまとわれる。彼は，その白昼夢を追い払うかのように，魂の再生を夢みて，Milton の "*Lycidas*" の断章を口ずさみ，[12] また，Yeats の抒情詩 "*Who goes with Fergus*", "*The Songs of Aengus*" などを口ずさみ，愛の使者 Fergus，愛の神 *Aengus* を invocate する。[13] 孤独に打ちひしがれた彼の魂は，優しき愛の手を求めて絶叫するのである。

Touch me. Soft eyes. Soft soft soft hand. I am lonely here. O, touch me soon, now. What is that word known to all men? I am quite here alone. Sad too. Touch, touch me. (*Ulysses*, p. 61)

このような精神的苦境に立たされた Stephen は，周知のように，父オデュッセウスを探し求める息子テレマカスとして象徴的に描かれているのであるが，[14] 肉親の父 Simon Dedalus を "legal fiction"[15] として拒絶する彼は，精神の父を探し求める。Stephen が，精神上の父子関係に思いを寄せ，精神の父を求めるのは，彼が過去において—つまり，『肖像』におい

て一古えのギリシアの名工ダイダロスを精神の父として啓示され，その存在を知ったことによって，おのれの昏迷せる魂を救われた経験があり，[16] 今度も，その経験を生かし窮地を脱しようとしているからである。すなわち，精神の父を再び探しあてることが，現在の精神的危機を救う唯一の道であると考えているからである。『ユリシーズ』において，Stephenが父オデュッセウスを探し求めるテレマカスとして描かれているのは，テレマカスが父オデュッセウスを探しあてることによって自分の窮地を救わんとしたことに結びつけられているのである。

しかし，ここで注意しなければならない点は，『ユリシーズ』の中で Stephen が求めている精神の父は『肖像』におけるダイダロスのような芸術の父ではなく，人間としての父であることである。『肖像』において啓示された父ダイダロスとは全く対照的な，あまりにも人間臭い Bloom という人間が,『ユリシーズ』において， Stephen がめぐりあう精神の父として意図されているのは，まさしく, Stephen が人間としての父を求めていることを示していると言えよう。

〔III〕

ジョイスは，かなり幼少の頃から Charles Lamb の *Adventures of Ulysses* を愛読し，ホメロスの『オデュッセイア』の存在を知り，いつしか，それを骨格とした遠大な作品を書こうと計画していたのであるが，[17] 一体，彼は『オデュッセイア』のどのような点にひかれていたのであろうか。それについては，チューリッヒ滞在中の彼の友人 Frank Budgen が伝えている次のような対話が明らかにしてくれる。

> ..."What do you mean," I said, "by a complete man? For example, if a sculptor makes a figure of a man then that man is all-round, three-dimensional, but not necessarily complete in the sense of being ideal. All human bodies are imperfect, limited in some way, human being too. Now your Ulysses..." "He is both," said Joyce. "I see him all sides, and therefore he is all-round in the sense of your scupltor's figure. But he is a complete man as well - a good man. At any rate, that is what I intended that he shall be."[18]

すなわち，彼は a complete〔all-round〕man, a good man としての主人公オデュッセウスの character に興味と魅力を感じたのであるが，さらに，彼は『オデュッセイア』を貫ぬく human な主題にも強くひきつけられた。彼は，それを自分の language pupil であった Georges Borach に次のように熱っぽく語っている。

> "...Why was I always returning to this theme? Now in *mezzo del cammin* I find the subject of Ulysses the most human in world literature...What a fine theme! And the return, how human! Don't forget the trait of generosity at the interview with Ajax in the nether world, and many other beautiful touches. I am almost afraid to treat such a theme; it's overwelming."[19]

以上の言葉から，ジョイスがホメロスの『オデュッセイア』を『ユリシーズ』の骨格として

利用したのは，一つには，彼が『オデュッセイア』に横溢せる human な主題，主人公オデュッセウスの complete〔all-round〕な real な人間像に魅力を感じ，それらを自己の作品に生かしたいと考えたからであると察せられる。それは，彼自身の言葉を借りれば，『肖像』におけるオウィディウスのダイダロス神話の利用と同様に，『オデュッセイア』という永遠の神話を現代の様相の下に置き換えることであった。

...My intention is to transpose the myth *sub specie temporis nostris*...[20]

さて，このようにして，『ユリシーズ』の下敷とされたホメロスの『オデュッセイア』は，Gilbert Heighet が指摘しているように，[21] 冒険物語であると同時に戦争と追放によって離別していた父と子が互いに探索しあい，苦難の果てに再会する，"quest story" であり，そしてまた，その再会によって，父と子が失なわれていた本来の自己を取りもどす "recovery story" と見なすことができる。従って，この点に着目すれば，先述した『オデュッセイア』との平行関係からジョイスの『ユリシーズ』が探索ー邂逅ー回復の物語であると考えられ得る。しかしながら，そのように考えた時，一番問題となることは，Stephen の精神の父となるべきBloomなる人間が，卑俗で好色で物欲的で快楽主義的な人間としか考えられないように見えることである。多くの批評家は，そうしたBloomに失望し，嫌悪感を抱き，結局『ユリシーズ』を『オデュッセイア』の parody として，あるいは，mock-heroicとして解する誤りを犯してしまっている。[22] 確かに，Bloomの一日の言動をたどってみると，彼の物欲性・好色性・享楽性は否定できない。[23] しかしながら，ここで，もっと公平な立場からBloomの言動を注意深く見直してみれば，我々は彼が単に卑俗な人間だけではないことが知られるであろう。彼には人間・動物を問わずに注がれる深い sympathy と pity，いわば，"universal love"[24] が生来の美質として具わっているのであり，また，human な社会的関心と姿勢が秘められていることが知られるのである。[25] 我々は Bloom という人間が，先述したようなオデュッセウスの多面的人間性を反映する高貴と卑俗との両面を具有した生の人間として描かれていることをみのがしてはならないのである。

このようにして，Stephen が放浪の果てにめぐりあうに至る Bloom は，半面において卑俗な人間であるが，他面，ユダヤ人，寝取られ亭主などと仲間から嘲笑され屈辱的な毎日を送っているにもかかわらず，人間愛を主張しながら生きている善意にあふれた人間である。それは，彼の次のような言葉が如実に示している。

—But it's no use, says he. Force, hatred, history, all that. That's not life for men and women, insult and hatred. And everybody knows that it's the very opposite of that that is really life.
—What? says Alf.
—Love, says Bloom. I mean the opposite of hatred. (*Ulysses*, p. 432)

ジョイスは，学生時代に書いた "Force" と題する essay の中で，社会全体としては自然・他民族などの外部からの破壊的 force を征服することが必要であるが，個々の人間にとってまず第一に必要なのは，自分自身の内部に存在する破壊的 force ー他人に対する思いやりのない anger, sneer, selfishness, conceitness, fretfulness などーを love によって互いに克服することであり，それが究極的に社会の安定と平和をもたらすと主張している。[26] この人間相

互の love を根底とした博愛の理念は，まさに先の Bloom の主張と一致するものであり，その一致点において，我々はStephenと同様に Bloom にもジョイス自身の半面が注ぎこまれていることを知る。そして，Bloom が半面においてジョイスの分身であり，問題の Stephen と Bloom の邂逅は，実はジョイス自身の二面の結合の象徴的表現であるかもしれないと感ずるのである。[27)]

〔Ⅳ〕

これまで述べてきたことをふまえて，本稿の目的である Stephen と Bloom の邂逅の持つ意味に触れてゆくことにしよう。

StephenとBloomは，ホメロスの『オデュッセイア』と同様に，紆余曲折を経た後，一日の終り近くMaternity Hospitalにおいて初めて顔を合わせる。それぞれに，愛に傷ついた者として－母を裏切っ者と妻に裏切られた者として－。Stephenは，苦悩を追い払うかのように我を忘れて医学生達と酒にひたり卑猥な話に打ち興ずるが，Bloom はそうしたStephenに何となく父性愛を感ずる。そして，Stephenが仲間と連れだって Mabbot 街へと酒と女を求めて飛び出していったのを追いかけてBella Cohen の売春宿へと潜入してゆく。この売春宿の中でStephen は，またしても，裏切った母の悔俊を迫まる恐ろしい幻につきまとわれ狂ったように暴れまわる。Bloom には，Stephenの心の苦悩が何であるのかわからないが，ともかく，狂ったように暴れまわりその果にイギリス兵Carと口論の上，殴打され一人路上に気絶してとり残されたStephenを助け出し優しくいたわってやる。そして，さらに彼は栄養失調のStephenを深夜喫茶に連れてゆき腹ごしらえさせ，親身になって現在の放蕩生活を改めるように説得する。それから，彼が無宿なのを知って自分の家へ連れて帰り温くもてなしながら対話する。

第十七挿話は，その対話の内容が mathematical なcatechismの問答形式によって叙述される。この文体の持つ意味をFrank Budgenのように，[28)] unemotional でunhumanなものと解し，その点からStephenとBloomの邂逅における communion の欠如を暗示する文体であるとみなす人が多くいる。しかし，それはむしろ逆に，二人の間の思想・性格・生い立ち・趣味・嗜好などを客観的に比較し，その相違点を明白にしながら可能な限りの共通点を浮き彫りにせんとする意図から用いられた文体ではないであろうか。つまり，二人の communion の可能性を客観的に探索する意味を担った文体なのではないだろうか。第十六挿話の終り近く，Stephen とBloom は帰宅の途中すでに微少ではあるが互いに共通点を認識し合っていた。

> Though they didn't see eye to eye in everything, a certain analogy there somehow was, as if both their minds were travelling, so to speak, in the one train of thought. (*Ulysses*, p. 764)

従って，この十七挿話は二人が種々の対話をとりかわしながら communicate する挿話であると考えられる。結局，二人は次のような点において一致点を見い出している。

> Both were sensitive to artistic impressions musical in preference to plastic or pictorial. Both preferred a continental to an insular manner of life, a

cisatlantic to a transatlantic place of residence. Both indurated by early domestic training and an inherited tenacity of heterodox resistence professed their disbelief in many orthodox religious, national, social and ethical doctrines. Both abmitted the alternately stimulating and obtunding influence of heterosexual magnetism. (*ibid.*, p. 777)

Stephenにとって，売春宿での窮地を救われ温くもてなされたことは，無論それなりに大きな救いであったが，彼が得た究極の救いは彼の人間的精神の覚醒にあった。つまり，肉親・兄弟・友人の誰とも融合できなかったegoisticでinhumanな芸術家Stephenにとっては，Bloom の存在を知り，彼の人間性と思想に触れたことが－『肖像』におけるダイダロスの啓示が芸術家としての道を示唆したように－人間としてのあるべき姿を発見し認識する手がかりとなったのであり，それが同時に救いとなったのである。先に触れたように，博愛を人生を貫ぬく根本精神として生きぬいているhumanでunselfishでsocialなBloom は，まさに，Stephen と対照をなす人物であり，人間としてのStephenに欠如しているものを現実的に具現し啓示した精神の父であったと言えよう。

精神の父Bloom の具現している博愛と社会性は，実は振り返ってみると，Stephenが『肖像』の中で，友人から，将来学びとるべきものとして予告されていたものであり，

—Dedalus, said MacCan crisply, I believe you're a good fellow but you have yet to learn the dignity of altruism and the responsibility of the human individual. (*A Portrait*, p. 203)

また，母からも学びとるように言い残されていたことであった。

26 April : Mother is putting my new secondhand clothes in order. She prays now, she says, that I may learn in my own life and away from home and friends what the heart is and what it feels (*ibid.*, p. 257)

結局，それは，『ユリシーズ』の冒頭においてStephenの非人間性を糾弾したMulligan が，彼の求めるべき救いとしてほのめかしたhumanなギリシア的精神とも言うべきものであったと言えよう。

—God, he said quietly. Isn't the sea what Agly calls it: a grey sweet mother? The snotgreen sea. The scrotumtightening sea. *Epi oinopa ponton.* Ah, Dedalus. the Greeks. I must teach you. You read them in the original. (*Ulysses*, p. 3)

〔V〕

孤独な迷える芸術家 Stephenは，William York Tindall が述べているように，[29] Bloom と

の邂逅によってhumanityに目覚め救いを得たのであり，裏切った母への人間的苦悩はBloomとの邂逅を救いとした試練であり，Stephenの放浪はその意味において一つの暗夜行路であったと言えよう。無宿のStephenがBloomの宿泊の勧めをことわって，一人夜明け近いダブリンの町へと立ち去ってゆくのは，彼がBloomに失望したからではなく，逆にそれはBloomとの触れあいによって精神的混迷を脱し新しい人生の夜明けへと出発する彼の積極的な勝利の姿を暗示しているのである。[30]

以上，『ユリシーズ』をジョイスによる自己表現という観点からながめ，その問題点を考察してきたつもりであるが，ジョイスが『ユリシーズ』の中で描こうとした自己の「肖像」とは，結局，彼が『ユリシーズ』の一日として1904年6月16日という日を選んだことに託されているように思われる。何の意義もないように見えるこの1904年6月16日という日付けについて，Ellmanは伝記的観点から次のように説明している。

> The appoint was made, and for the evening of June 16, when they (Joyce and Nora Barnacle) went walking at Ringsend, and thereafter began to meet regularly. To set *Ulysses* on this date was Joyce's most eloquent if indirect tribute to Nora, a recognition of the determing effect upon his life of his attachment to her. On June 16 he entered into relation with the world around him and left behind him the loneliness he had felt since his mother's death. He would tell her later, "You made me a man." June 16 was the sacred day that divided Stephen Dedalus, the insurgent youth, from Leopold Bloom, the complaisant husband.[31]

すなわち，この日は母の死後，ダブリンに低迷していたジョイスが終生かわらぬ愛を分ち合った最愛の妻Nora Barnacleと初めてdateをした記念すべき一日であり，それを契機として彼が孤独を脱し人間として成長し芸術家として再出発することができた，いわば，彼の人生のturning pointとなった一日であったのである。こうした点をも考え合わせて『ユリシーズ』を自己表現という視点からながめれば，この小説は，自己の全的表現を目標とした芸術家ジョイスが，前作『肖像』において描き切れなかった自己の，特に，人間としての内なる苦悩と発展の跡をホメロスの『オデュッセイア』を背景としたStephenのBloomとの邂逅という形態に劇化し，象徴的に描いた作品であったと解釈できるのではないかと思う。

Text:

A Portrait of the Artist as a Young Man (Jonathan Cape, 1968)

Ulysses, 7th ed. (Bodley Head, 1967)

Notes:

1) 本稿においては，以下『肖像』あるいは *A Portrait* と略す。

2) 彼は次のように言っている。

...His life's task if abundantly egotiscal was wholly serious, a presenting of himself and his immediate environment to the world in fictions laying claim to the highest representative significance. J. I. M. Stewart, *James Joyce*, "Writers and their Works : No. 91", reprinted.

(Longmas Green. 1967), p. 6

3) この点は『現代イギリス小説』(開拓社, 昭和44年) の中で, 川口喬一氏が取りあげられたような『肖像』の結末, 及び『肖像』と『ユリシーズ』の連続性の問題と関連してくる。筆者は, 『肖像』のあまりにも高揚した結末は皮肉的に『ユリシーズ』の沈滞した冒頭部分へと発展しoverlapしていくことが予定されている, つまり, Stephenの飛翔は, イカルスの飛翔として墜落させられることが予定されていると考える。それは, 『肖像』におけるStephenの「肖像」が『ユリシーズ』におけるそれと重ね合わせられることによって初めて完成されることが予定されているからである。

4) See Richard Ellman, *James Joyce* (Oxford Univ. P., 1959), Chapter Ⅷ－Ⅹ.

5) Stephenにおける母の問題は『ユリシーズ』の中心的モチーフの一つであるが, 同時に『肖像』から連続しているモチーフであることに注目する必要がある。Cf. Joseph Prescort, *Exploring James Joyce* (South Illinois Univ. P., 1966), p.63.

6) *Ulysses*, p. 4.

7) *Ibid.*, p. 5. Mulliganは嘲笑的にこの言葉をStephenに浴びせかけているが, "paralysis"なる言葉は『ダブリン市民』のテーマとなったあの「精神の麻痺」を思い起させる。その点から, Mulliganは現在のStephenの精神が人間的に麻痺していることを皮肉っているものと考えられる。

8) Stanislaus Joyce, *My Brother's Keeper* (Viking Press, 1969), p. 91.

9) *Ibid.*, p. 238.

10) *Ibid.*, pp. 245－59.

11) See e.g "*Exiles,*" *The Essential James Joyce*, ed. Harry Lewin (Jonathan Cape, 1965) p. 376 and 397.

12) *Ulysses*, p. 30－31.

13) *Ibid.*, p. 9, 10, 702.

14) 『ユリシーズ』と『オデュッセイア』との照応関係を究明したStuart Gillertの *James Joyce* (Oxford Univ. P., 1959) 参照

15) *Ulysses*, p. 266.

16) See *A Portrait*, p. 173.

17) A. Walton Litz, *The Art of James Joyce* (Oxford Univ. P., 1964), p. 1.

18) Frank Budgen, *James Joyce and the Making of Ulysses*, 4th ed. (Indiana Univ. P., 1967), p. 17.

19) See Ellman, *James Joyce*, p. 430.

20) See *Letters of James Joyce*, vol. I, ed. Stuart Gilbert (Faber, 1957), p. 147.

21) See Gilbert Heighet, *The Classical Tradition* (Oxford Univ. P., 1949), p. 506.

22) 例えば, Robert HumphreyやJ. I. M. Stewartなどは『オデュッセイア』との対照において, 『ユリシーズ』を卑俗な現代人・現代生活のsatireあるいはmock-heroicであると解している。Cf. Robert Humphrey, *Stream of Conciousness in the Modern Novel* (4th ed.; University of California P., 1965), p. 16 及びJ. I. M. Stewart, *op. cit.*, p. 27. これらの意見は『ユリシーズ』を一面的にparodyのためのparody とみなす意見であり, 全面的には承服し難い。この点は, 次のようなジョイスの積極的な人生肯定の言葉からも明らかではないだろうか。

> ...It is a sinful foolishness to sign back for the good old times, to feed the hunger of us with the cold stones they afford. Life we must accept as we see it before our eyes, men and women as we meet them in the real world, not as we apprehend them in the world of faery... *The Critical Writings of James Joyce*, ed. Ellsworth Mason and Richard Ellman (Faber, 1959), p. 45
>
> ...Life is not to be criticized, but to be faced and lived … *ibid.*, p. 67.

23) Kristian Smidt などは，Bloom の否定的な卑俗面を次のように，ジョイス自身あるいは西洋人全体のscapegoat とみなしているが，鋭い洞察であると考えられる。

As a matter of fact, Bloom's role as a scapegoat is a very important one. In the first place, it may be taken to indicate Joyce's personal need of an atonement-symbol, especially to set off the ungodliness of Stephen and his companions. In the second place it adds to *Ulysses* the nearest thing Joyce could produce in such a work to a tragic hero; or, in cultic terms, to a *communal* atonement-symbol. Bloom as a narcissist, a non-believer, and a man betrayed, may be a private scapegoat of the author. Bloom as a Jew is the scapegoat of Western man. Kristian Smidt, *James Joyce and the Cultic Use of Fiction*, revised ed. (Oslo Univ. P., 1959), p. 49.

24) *Ulysses*, p. 432. Bloom が charity, fraternity を motto とする Freemasonry の会員であることが随所に示されているが，それは彼の博愛主義をあらわすものとして注目すべき点である。Cf. p. 190. 226, 578, 583. *etc*,.

25) 頻繁に "Poor!" なる言葉を発する Bloom を sentimentalist であると見なす人が多いが，それは，彼が本質的に "a man of sympathy" であるからである。その sympathetic な人間性は，p. 65－66（第4挿話），p. 112, 119－121, 129（第6挿話），p. 197－202, p. 230－233（第8挿話），p. 408, 416, 427, 479, 497,（第13挿話），p. 510, 533－534（第14挿話），p. 581, 697－703（第15挿話），704－776（第16挿話全体）等における彼の言動を注意深くながめてみれば明らかとなろう。また，Bloomは随所で種々の社会改善・事業・福祉などの問題に言及しており，彼が social な関心と熱情を秘めた人間であることが知られる。この点も，同様に，p.191, 229, 233（第8挿話），p. 431－432（第12挿話），p. 630（第14挿話），p. 732－742, 743－747（第16挿話），p. 842－843（第17挿話）等における彼の言動を注意深く振りかえってみれば明らかとなろう。

26) See "Force," *The Critical Writings of James Joyce*, pp. 17－24.

27) この点に関して，Harry Levin などは Stephen と Bloom の関係をジョイス自身の内面における artist と citizen の対立と解釈し，その結合には悲観的見解を示している。See Harry Levin, "The Two Keys," *James Joyce: A Critical Introduction*, 2nd ed. (Faber, 1960), pp. 65－80.

28) See Frank Budgen, *James Joyce and the Making of Ulysses*, p. 259.

29) 彼は次のように言っている。

...Stephen's simultaneous quest, though its end is more or less implicit, is successful... Not entirely aware of what he needs and wants, he finds both by meeting Mr. Bloom and, with his aid, apprehending Mrs. Bloom. Meeting human Mr. Bloom and suddenly understanding humanity, Stephen becomes a kind of Bloom, leaving pride for charity, and inhumanity for acceptance of mankind. W. Y. Tindall, *A Reader's Guide to James Joyce* (Thames and Hudson, 1968), p. 125.

30) Stephen と Bloom の邂逅に大きな意義を認める Edmund Wilson は，この点に関して次のような示唆的な言葉を与えている。

As for Stephen, unresponsive as he has seemed to Bloom's interest and cordiality, he has at last, none the less, found in Dublin someone sufficiently sympathetic to himself to give him the clew, to supply him with the suject, which will enable him to enter

imaginatively — as an artist — into the common life of his race... it is certain that Stephen, as a result of this meeting, will go away and write "Ulysses." Buck Mulligan has told us that the young poet says he is going "to write something in ten years": that was in 1904—"Ulysses" is dated at the end as having been begun in 1904. Edmusd Wlison, *Axel's Castle* (Charles Scribner's sons, 1969), p. 202.

31) Ellman, *James Joyce*, p. 162—163.

付 記

本稿は昭和46年1月に提出した修士論文に準拠しつつ，4月の名古屋大学英文学会第11回総会で発表したものの一部を補筆してまとめたものである。